

# News Letter

奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所

## 下市町×大和・紀伊半島学研究所 連携シンポジウムの報告

【奥村 和美】

令和2年(2020年)12月20日(日)に、奈良県吉野郡下市町との連携にて、シンポジウム「下市町の歴史の再評価～歴史的アイデンティティーを取り戻す～」が開催されました。本研究所では、奈良盆地を含む紀伊半島をフィールドとして、自然と人間の持続可能な共生関係を構築する手だてを探るべく、地方自治体との連携シンポジウムを年に1回行うこととしています。平成30年(2018年)に第1回のシンポジウムを吉野郡大淀町と、令和元年(2019年)に第2回シンポジウムを吉野郡東吉野村と連携して行い、今回は、その第3回にあたります。下市町と本学は、平成23年の「らくらく農法プロジェクト」をきっかけに交流が始まり、現在は協働機関として様々なプロジェクトを通して連携を深めているところです。今回のシンポジウムは、かつて吉野郡の枢要の地であった下市町の歴史を、交通・宗教・商業の各側面から検討し直し、下市町を歴史の中に正しく位置づけ、そのアイデンティティーを再構築しようという趣旨です。

当初は、下市町1カ所で開催する予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の第3波到来の状況から、会場を下市町と奈良女子大学の2カ所に分け、下市町での講演の様子を、奈良女子大学にオンライン中継しました。下市町には講師と地元の観光ボランティアガイドの方々が参加、奈良女子大学では学生や一般申込みの方々に参加していただきました。このような形式での開催は初めてでしたが、関係各位の綿密な事前打ち合わせによって、当日はたいへんスムーズに進行しました。なお、当日の様子は、もしもいちテレビによって下市町内に放送されました。

開会の挨拶は、大和・紀伊半島学研究所の保智己所長にいただきました。最初の西谷地氏の講演は、戦後、司馬遼太郎氏によって熊野街道(十津川街道)の起点が五條とされたことの誤りを指摘し、近世から明治初期の史料に基づいて、起点が下市町であったこと及び下市町を中心として吉野の各郷村間が合力関係にあった



保所長の挨拶(奈良女子大学会場)



奈良女子大学会場の様子

### TOPICS

- ・ 下市町×大和・紀伊半島学研究所  
連携シンポジウムの報告
- ・ 新共生科学研究センター長の挨拶 (共生)
- ・ 野外体験実習の報告 (共生)
- ・ 着任の挨拶 (共生)
- ・ 第20回共生科学研究センター  
シンポジウムの報告 (共生)
- ・ 研究内容の報告 (古代)
- ・ 第16回若手研究者支援プログラムの報告 (古代)
- ・ なら学研究センターに  
とっての2020年度 (なら)
- ・ なら学研究会活動報告 (なら)
- ・ 奈良県地域振興部との共同研究 (なら)
- ・ シンポジウム「下市町の歴史の  
再評価」参加記 (なら)

ことが述べられました。続く齊藤氏の講演は、丹生川上神社が下市町にあることに注目し、古代信仰の歴史をひもときつつ、下市町をいわゆる「黒潮の道」における交易の結節点であったと位置づけられました。最後の大西氏の講演は、南朝の山城を紹介しつつ下市町に根付き文化を育んだ南朝に触れ、江戸時代以降は、大阪や熊野に通じる一大商業地として繁栄したことを豊富なスライドによって説明されました。

講演会の後は、総合討論とし、2会場がオンラインで一つになったの討論会となりました。下市町や奈良の観光ボランティアガイドの方々からの貴重な発言もあり、下市町への歴史認識がいっそう深められました。最後に、下市町の小林雄一副町長よりご挨拶を賜り、無事閉会となりました。参加人数は、下市町会場16名、奈良女子大学会場24名でした。



総合討論の様子(下市町会場)

- 講演会 13時～14時40分 進行 奈良女子大学教授 奥村 和美
  - ・下市の歴史的市位置  
講 師:奈良女子大学教授 西谷地 晴美
  - ・宗教空間の連続性と特異性からみる下市町  
講 師:奈良女子大学特任助教 齊藤 恵美
  - ・南朝の武士団と下市の商人  
講 師:下市町文化連盟会長 大西 一則

- 総合討論 14時50分～15時40分

\*なお、当日ご参加いただいた大淀町教育委員会の松田度氏が書かれた参加記を本誌10・11ページに記載しています。

## 共生 新共生科学研究センター長の挨拶 【酒井 敦】

2020年10月1日付で共生科学研究センター長に就任いたしました。大石正、古川昭雄、和田恵次、高田将志、保智己という歴代センター長やセンター員の皆様がこれまで築き上げてきた実績と伝統を引き継ぎ、発展させるべく精進して参ります。どうぞよろしくお願いいたします。

共生科学研究センターは「日本列島の中心付近に位置し多様な自然環境に恵まれた紀伊半島を主な対象地域として、共生循環型社会を創生する科学、すなわち「共生科学」の研究を行い、その成果に基づいて自然環境と共存できる人間活動のあり方について広く提言を行う」ことを目指しています。本センターの名称に含まれている「共生」は、生物学的、宗教的、社会的、そして哲学的な文脈において、様々な意味で用いられていますが、本センターの英語名称は“*KYOUSEI Science Center for Life and Nature*”と、「共生」の英訳として日本語の発音そのままの“*KYOUSEI*”をあてております。これは、上述のような幅広い概念を包含し得る既存の英単語が存在しないことによるものでもありますが、「生物科学分野における“共生”だけではなく、文化的・社会的・哲学的な側面も含めたより広い意味での“共生”を研究する」という意思と理念を示すものでもあります。こうした理念に基づき、本研究センターには本学内の人文科学系、自然科学系、生活環境科学系のすべてから、また学外からも、様々な分野の研究者が参画しており、それぞれの専門知識や技術を活かしつつ融合的・学際的な研究を行っています。また、次の時代を担う子供たちを対象とする野外体験実習や、奈良県内各所で開催される一般市民を対象とするシンポジウムなども積極的にを行い、共生科学研究の成果や理念の公開・普及に努めて参りました（今年度の活動についてはそれぞれの報告をご覧ください）。本研究センターでは今後もこうしたオープンで相互に刺激をもたらすような活動を、



それ自身「共生」の理念に従った形で継続的に実践し、その役割を果たしていきたいと思っております。

シンポジウムや野外体験教室を通じて共生科学研究の成果や理念を社会に発信していくためには、その前提として研究センター内部はもちろん、センター外との連携を強化することによる研究活動の充実・活性化が必要不可欠です。また、大学の組織である以上、研究の成果を社会一般に対してのみならず、「学生に対する教育」にも活用することが望まれます。こうした観点から、令和3年度以降は共生科学研究センターを結末点とする研究交流の促進と、その成果の教育への活用に、今まで以上に注力していきたいと考えています。具体的には第一にセンターセミナーの活性化と教育への活用、第二にセンターが保有する設備・機器の共同利用の促進です。

まず、センターセミナーの活性化と教育への活用についてですが、共生科学研究センターのセミナーは従来、共生科学研究センターのメンバーもしくはその関係者が輪番で研究成果の紹介を行うという、センター内で閉じた形で年2回程度の頻度で行われてきました。しかし、2020年度からは、大学院博士後期課程向けに新設された科目である「共生科学特別演習」の教育に、センターセミナーを活用することとなりました。そうなりますと、学生だけではなく、学内スタッフに対してもある程度開かれた形のセミナーとして、もう少し高頻度で開催した方が研究交流の面からも教育への利用という観点からも望ましいように思われます。そうしたことから、センターセミナーに関しては、センター員の研究成果紹介とゲストの講演を織り交ぜて、学内の学生・スタッフの参加を促進しつつ年4回程度の頻度で開催する方針で考えています。随時ご案内しますので、ご興味のある方はぜひご参加いただければと思います。

次に、センターが保有する設備・機器の共同利用の促進についてです。共生科学研究センターは北魚屋東町のコラボレーションセンターに事務室（Z107号室）、共通実験室（Z108号室）と生物育成室（Z109号室）を備えているほか、東吉野村の旧四郷小学校に大和・紀伊半島学研究所の分室があり、そちらの管理・運営にも実質的に関わっています。大学運営費が全体的に縮小するなかで、センターの管理する研究・教育用の資源をセンターのメンバーはもとより、学内や学外の皆様に広く有効活用していただくことは極めて大事な意味があると考えております。Z108共通実験室には現在、冷凍庫、恒温乾燥機や電子天秤、オートクレーブ滅菌機、各種顕微鏡、PCR/DNA実験関連各種機器（サーマルサイクラー、プレート用を含む各種遠心機、ヒートブロック、トランスイルミネータ）、元素分析各種機器（微量有機元素分析装置、真空乾燥機、加熱燃焼器）、粉碎機、純水製造機などが設置されています。Z109生物育成室は制御された環境のもとで動植物の飼育・栽培が可能で、つい最近、製氷機も設置されました。これらコラボレーションセンターの設備・機器に関しては、次年度以降も順次、各種の実験・測定装置を充実させていきたいと考えています。共生科学研究センター共通実験室の利用については利用登録が必要です。利用登録は年1回行っておりますが、年度途中でもご相談いただけます。ご興味のある方は共生科学研究センター事務室（内線3687）までお問合せください。東吉野村の旧四郷小学校分室の整備などは、大学からの財政支援も受けてだいたい進んではきたものの現在もなお進行中、利用促進のための情報公開や手続きの整備などはまだこれから、という段階です。こちらについても、できるだけ多くの



Z108共通実験室に設置されている分析機器等



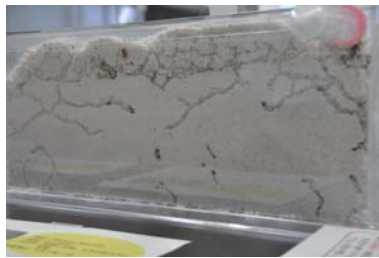
Z109生物育成室の様子

皆様に有効に利用していただけるよう、設備と制度を整備してまいりますので、準備が整いましたら是非ご利用いただければと思います。

## 共生 野外体験実習の報告 【三方 裕司】

2020年10月10日（土）13:00より16:00まで、奈良女子大学B115教室にて令和2年度野外体験実習を開催しました。近隣の小中学生を対象として参加者を募集したところ、定員を超える多数の応募があり、抽選の結果、小中学生10名と保護者3名の方々にご参加頂き、スタッフ9名で実習を実施することとしました。新型コロナウイルス感染症予防対策に加えて台風14号の接近があり、事前準備や開催可否の判断が難しい場面もありましたが、当日は台風のピークが過ぎて午後からは雨も上がり、何とか無事に実習を開催することができました。

今回は、「アリ」を題材にして実習を行いました。異なる巣から採取したアリ同士の対戦実験や、いろいろな「におい物質」に対するアリの行動を観察することによって、アリにとっての重要な情報伝達手段であるフェロモンについて学習しました。特に、アリを寄せつけない物質の開発研究については、多方面への応用が可能であるため、最先端の研究であることが紹介されました。実習の最後には、アリの樹脂標本を作製し、各自ひとつずつ自作の標本を持ち帰りました。参加者からは「子供だけでなく、大人も好奇心が掻き立てられる内容でした」や「アリの家族愛を観察し、驚きました」といった声が聞かれ、実習は盛況のうちに終わることができたようです。最後になりましたが、本実習の開催には、共生科学研究センター協力研究員他の方々の多大なるお力添えを頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。



野外体験実習の様子

## 共生 着任の挨拶 【上尾 達也】

2020年4月より共生科学研究センターの非常勤研究員として着任いたしました上尾と申します。新型コロナウイルス感染流行に伴う混乱から、着任のあいさつのはずがもう年度末となってしまいました。奈良女子大学の前は神戸大学理学部に所属しており、その時点から協力研究員として共生科学研究センターにはお世話になっておりました。正式に本センターに籍を移してからも、以前に引き続きヒトとアリを対象とした化学感覚についての研究に従事しています。メインとなるのはヒトの赤ちゃんのにおいに関する研究です。赤ちゃんは生きていくためにお母さんをはじめとした周りの大人に世話をしてもらう必要があります。少し大きくなってくれば、泣いたり笑ったりしてお母さんとコミュニケーションをとることも可能ですが、生まれたばかりではそれもままなりません。そこで、生まれた直後の赤ちゃんがお母さんに訴えかける手段があるならば、それはにおいではないかと考えました。浜松医科大学病院の協力のもと、出生後30分以内の赤ちゃんのにおいを採集することに成功し、におい成分を同定することができました。その同定したにおい成分から個々の赤ちゃんのにおいを再現した調香品を作成し、この匂いに対してどのような印象を抱くかを確かめる心理実験を行ってきました。本年度は奈良女子大学の学生さんに協力してもらって、赤ちゃんのにおいの心理効果についての解析を進めていく予定でしたが、このコロナ禍の情勢下では、残念ながら多くの人を集めての心理実験は難しく、既存のデータに小規模な実験データを追加してまとめることにしました。

もう一つのテーマはアリの巣仲間識別のための仕組みです。アリは別の種類はもちろん、同じ種類であっても巣が違えばお互いに敵とみなして戦いあいます。その時、アリが体表に分泌しているにおい（体表炭化水素）の違いを認識して敵味方を識別していることが知られています。別の種類のアリならば分泌しているにおい成分が異なるので識別は簡単です。ところが同種であるならにおい成分の種類自体は同じなので、その成分比の違いを見分ける必要があります。普通に考えるとその識別を行っているのは脳だと思っております。

しかしながら、アリの鼻に相当する巣仲間識別感覚子内の微細構造を観察すると、そこににおいの微妙な差を検知するための回路が存在することを見出しました（図1）。本年度は、感覚子内の回路で処理された情報が嗅覚中枢に送られている様子を可視化して解析しました。ところで、アリを実験に用いるためにはその安定供給が不可欠です。神戸大ではアリの巣穴の位置が代々伝えられていていつでも採りに行けるのですが、奈良女子大学では巣穴を探すところから始める必要があります。ところが女子大のアリは奥ゆかしいのか巣穴がさっぱり見つからず、しかも、新女王アリとオスアリは年に1回、5月の中旬の結婚飛行の時にしか取れないため、それまでには多くの巣を確保しておく必要があります。非常に焦りました。日々、キャンパス中を歩き回って巣を探している姿は不審者にしか見えないなと自分でも思っていました。ようやく見つけた巣の上には採集しやすくするために植木鉢を置いていたのですが（図2）、それも学内で話題になっていたと聞いています。また、今年度は東吉野の野外体験実習が行えず、ピンチヒッターとしてアリの行動実験をやらせていただきました。これも台風の影響があり開催が危ぶまれましたが、何とか無事開催でき、参加者の方には喜んでいただいたようでうれしく思っています。

私の希望を汲んで実験室には製氷機や純水製造機を導入していただきました。スムーズに実験できるようになり大変感謝しております。

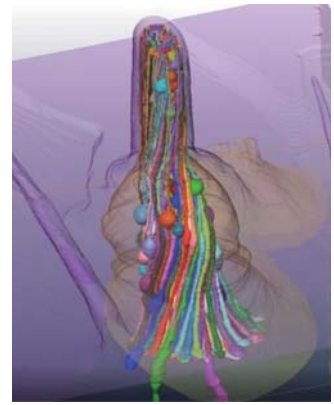


図1 クロオオアリ巣仲間識別感覚子内の神経突起の立体構築画像  
100本を超える嗅神経の神経突起がこぶ状構造を作りながら感覚子内部へ伸びている



図2 巣穴の上に植木鉢をかぶせると、中の空間を巣の一部とみなしアリが集まってくる

## 共生 第20回共生科学研究センターシンポジウムの報告 【村松 加奈子】

2021年1月9日（土）午後1時半より、第20回奈良女子大学共生科学研究センターシンポジウムが、COVID-19禍により、Zoomを用いたオンラインで開催されました。本シンポジウムは、第24回紀伊半島研究会のシンポジウムと共催で、「奈良盆地・紀伊半島の風水害と土砂災害」と題して、以下のプログラムの通り2つの講演とパネルディスカッションにて2つの話題提供がありました。

- 「開会挨拶」 前迫ゆり(紀伊半島研究会)
- 「趣旨説明」 高田将志(奈良女子大学)
- 「奈良盆地大和川流域の水害の特徴と防災」  
榎本博行(国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所)
- 「紀伊半島地域の土砂災害特性と防災」  
木下篤彦(国土交通省国土技術政策総合研究所  
・近畿地方整備局大規模土砂災害対策技術センター)

### パネルディスカッション

- 「奈良盆地・紀伊半島における災害発生に関わる気候・気象特性」  
木村圭司(奈良大学)
- 「紀伊半島の土砂災害史によせて」  
井上公夫(一般財団法人 砂防フロンティア整備推進機構)
- 「閉会挨拶」 酒井敦(奈良女子大学)

オンラインの開催ではありましたが、85名の参加がありました。

榎本氏からは、奈良盆地の成り立ち、人々のくらしが自然堤防上から盆地中央に移動し水害の被害を受けるようになり、どのような防災対策をとってきたのかについて、歴史的視点からのお話がありました。奈良盆地内の川は大和川に合流し「亀の瀬」という狭谷を通して大阪湾に流れ込むこと、「亀の瀬」が地滑りを起こすと奈良盆地が水浸しになるため、「亀の瀬」での溜まった地下水をぬく仕組みが、世界最大級の地滑り対策として現在行われていることが紹介されました。

木下氏からは、平成23年台風12号の災害での現地調査や地下の地盤や水のたまり具合を調べる電気探査により明らかとなった、深層崩壊発生メカニズムや、深層崩壊リスク評価方法について、最新の考えのお話がありました。台風直後の調査は危険が伴うため、すぐには調査できず、できたとしても電気探査には時間がかかるそうですが、ドローンを用いると台風直後に1日でデータが取得できるとのことで、今後どのようなことが明らかになっていくのか楽しみです。

木村氏からは、奈良盆地・紀伊半島での40年間の気象データの解析結果から、紀伊半島での降水パターンの特徴として、紀伊半島の南側に台風が位置する場合、東風が紀伊山地を上昇し1日あたり700 mmもの多量の雨が三重県の海側で降ることなどが、紹介されました。

井上氏からは、明治22年の十津川大水害、昭和28年の有田川大水害はいずれも、それぞれ、明治紀伊山地災害、昭和紀伊山地災害と呼ぶべきほどの大きな被害が広い地域で生じたものであったことや、自然災害伝承碑やお寺の住職さんの記録などから災害史をまとめているというお話がありました。

今回のシンポジウムでは、風水害に関して、歴史的視点からのお話と最新の観測技術やデータを用いたお話と盛りだくさんでした。風水害への防災対策は、観測データ分析・技術・工事等によって行われてはいますが、災害が発生しやすい場所に人間の暮らしの場所が移ってきたことも一因と言えます。防災への意識として、自然災害伝承碑など身近なものから訪ねてみようと思いました。

## 古代 研究内容の報告 【中澤 隆】

本年度は新型コロナウイルスの蔓延により、環境歴史分野において計画した外国の研究機関との共同研究がすべて中断しています。また、科研費・新学術領域研究「パレオアジア文化史学」の中での応募研究「旧石器時代の動物骨に関するタンパク質考古学的研究」においても共同研究者のアゼルバイジャン、ヨルダンなどで予定されていた発掘調査が実施できなくなったため、これまでよりも国内の考古資料の分析が増えました。中でも元興寺文化財研究所から依頼された、飛鳥・奈良時代の矢本横穴墓群（宮城県東松島市）出土馬具に使われていた帯（「繫（がい）」と読むそうです）の革を分析して、革の原料動物を特定する共同研究が始まりました（図1）。古墳時代の繫に用いられた皮革の動物種がわかっている例はほぼないのだそうです（片山健太郎「古墳時代馬具における繫の基礎的研究」史林、99巻、pp. 36-74, 2016）。

また、上記科研費の領域内での共同研究者である南山大学の上峯篤史先生から依頼された約4万年前の中国河北省の水簾洞遺跡から発掘された動物の骨についての分析も進めています（図2）。動物種の判定には帯の革や動物の骨に含まれているコラーゲンのアミノ酸配列を質量分析で解析して、それぞれの動物の配列と比較することが必要です。ところが4万年前の資料の中ではコラーゲンの分解が進んでいるため、既知の配列と比較するために十分な配列が得にくいという難点があります。それでもマンモスのような未知の動物の骨があるかもしれないと期待しながら分析を進めています。



図1. 矢本横穴墓群出土の「繫」の一部



図2. 中国河北省水簾洞遺跡から出土した動物骨

## 古代 第16回若手研究者支援プログラムの報告 【奥村 和美】

2020年度第16回若手研究者支援プログラムは、当初、8月23日(日)・24日(月)に奈良女子大学にて開催することを計画していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大の状況を考慮し、8月23日(日)1日だけのオンライン（zoomを使用）開催としました。

今回は、科学研究費基盤研究B「敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の展開」（代表：信州大学 西一夫教授）・同基盤研究C「歌における説話的意匠の形成」（代表：淑徳大学 白井伊津子教授）との共催で行いました。

午前は若手の研究発表会、午後は講演会としました。特に、午前の若手の研究発表会は、外出自粛要請に伴って学会や例会などが次々に中止された事態を憂慮し、若手研究者に発表の場を提供するべく、テーマ等の制限は設けず急遽、企画したものです。コロナ禍の中、少しでも若手研究者の活動を支援し、有為の若手研究者の育成に貢献することは、「若手研究者支援」という会の趣旨から言っても当然の使命と考えたからです。

午前の研究発表会では、上代から平安初期にいたるまでの作品を対象に、それぞれに日頃の研究成果が発表されました。発表資料は、事前にアップロードされたものを、参加者に各自ダウンロードしていただき、発表者には、当日、資料共有というかたちで画面に資料を表示しながら発表していただきました。質疑応答は、質問者にはzoomのチャットで挙手をしていただき、司会者がそれを見て指名するという方式で行いました。対面での研究発表とほとんどかわりなく進み、質疑応答でも混乱なく活発な議論が交わされました。

午後の講演会は、「訓詁と注釈」を大テーマとし、お二人の講師にお話いただきました。上代国文学の研究方法の基本である「訓詁と注釈」について、あらためてその根本をふりかえり、研究方法としてわかりやすくお話しいただきました。

はじめてのオンライン開催とあってさまざまに心配もありましたが、関係各位のご協力のおかげで事故もなくスムーズに運んだことは非常に幸いでした。また、遠方の北海道の方や子育て中の若手研究者の参加もあり、ふだんよりは参加者の層が広がったことは、思いがけない収穫でした。45名の参加でした。

### ○第1部 研究発表会 10時～12時30分

- ・仙覚『萬葉集註釈』における『日本書紀』の引用について  
発表者：皇學館大学大学院生 池上 遥平
- ・『新撰万葉集』巻上の掛詞における漢詩の対応  
発表者：筑波大学大学院生 祝 慧慧
- ・万葉集一四一八番「垂水の上のさわらび」考  
－漢籍の「蕨」「薇」「權」との関連より－  
発表者：同志社女子大学准教授 王 秀梅  
・司 会：奈良女子大学教授 奥村 和美

### ○第2部 講演 13時30分～17時

- ・説文解字の成立  
講 師：富山大学教授 森賀 一恵
- ・萬葉集漢語考証の諸問題  
講 師：京都府立大学名誉教授 山崎 福之

## なら なら学研究センターについての2020年度 【寺岡 伸悟】

コロナに始まりコロナに終わろうとする本年度、本センターも活動に大きな影響を受けました。たとえば、定期的に開催している「なら学研究会」は検討の末、オンライン開催という初めての試みとなりました（後欄参照）。また吉野郡下市町の下市アクティビティセンターも、普段は現地授業で活躍しましたが、今年は奈良女と下市町をオンラインで結んだ授業を行なう際の下市側の拠点として重要な役割を果たしました。また、研究所と下市町の合同シンポジウム（於下市町）での準備拠点としても活躍してくれました。こうした経験は、コロナ収束後も大いに活かせると感じており、今年度予算では、そうしたオンライン会議用の機器の整備を行ないました。

一方、こうした中での地方創生、地域社会解決に関する研究も進みました。「ICTを活用した遠隔コミュニケーションシステムSailを使用することでコミュニティ形成に与える影響の効果検証」というテーマの共同研究を、センターメンバー、東京大学、IT企業、千葉県の自治会など産学民で実施しました。

さらにセンターの西村雄一郎・浅田晴久・室崎千重准教授および寺岡伸悟らが、『十津川村史』の編纂委員として活動してきました。2020年は十津川村置村130年にあたります。『十津川村史地理自然編』は2021年春刊行予定です。

今年度もセンター紀要『なら学研究報告』を複数号発刊し、大学のリポジトリで公開しました。また、月刊誌『月刊大和路ならら』において「続・続大学的奈良ガイド」による連載も継続し、なら学研究成果を広く社会に発信しています。

## なら なら学研究会活動報告 【磯部 敦】

なら学研究会では、「なら」の研究、および「なら」を研究してきた人びとの再評価をおこなうべく、2020年度は3回の公開研究会と1回の非公開勉強会を開催しました。

- ・ 第29回研究会（2020年8月23日）  
「春日神鹿保護会の記録・組織・活動 一鹿の保護活動そその当事者たちの分析―」  
東城義則氏（立命館大学・客員研究員）
- ・ 勉強会（2020年9月20日）  
「『ならら』編集の日々を振り返って」  
鈴木元子氏（編集者）
- ・ 第30回研究会（2020年10月25日）  
「近世奈良町木辻遊廓の歩み」  
井岡康時氏（奈良大学・教授）
- ・ 第31回研究会（2021年2月20日）  
「いかにして〈なら学文献〉を料理するか ―研究アプローチと課題―」  
磯部敦（奈良女子大学・准教授）

コロナウィルス感染拡大の状況に鑑み、開催はすべてオンラインで行いました。対面と違って資料回覧はできず、空間を共有できないことによる議論の低調が懸念されましたが、授業で慣れていたこともあるのか、活発な議論が交わされました。研究会等の告知、および開会後の印象記など詳細については、なら学研究会ウェブサイトで公開しています。ご参照ください（<http://narastudies.hateblo.jp/>）。

### ■澤田四郎作研究

なら学研究会では、奈良県五位堂出身の小児科医・民俗学者である澤田四郎作(1899～1971)にスポットをあてて研究しています。民俗学者とはいえ、郷土玩具に考古学、土俗風俗から短歌狂歌など、澤田が身を置いていたネットワークはきわめて多彩です。それは、私たちの「専門」意識を、さらに言えば「専門」化し硬直化した研究方法を相対化する視点でもあります。今年度



は、澤田の人脈を明らかにするため、宝塚澤田家所蔵『日誌』（昭和9年分）と大阪大谷大学澤田文庫所蔵『日誌』（大正15～昭和2年）を翻刻し、大和・紀伊半島学研究所なら学研究センター紀要『なら学研究報告』誌上で公開しました。

・磯部敦・三浦実加「翻刻 澤田四郎作『日誌』（昭和9年分）」  
（『なら学研究報告』3、2020年8月）

・磯部敦・三浦実加「翻刻 澤田四郎作『日誌』（大正15年10月～昭和2年4月）」  
（『なら学研究報告』5、2020年12月）

奈良女子大学学術情報センターのリポジトリで公開しています。こちらをご参照ください。

## ■『なら学研究報告』

先に記したとおり、『なら学研究報告』は大和・紀伊半島学研究所なら学研究センター紀要（ウェブジャーナル）です。今年度は上記2本のほか、

・磯部敦「近代奈良県書物文化環境一覧」（『なら学研究報告』4、2020年9月）も公開しました。近世後期から戦後直後までの奈良県域に所在した印刷所、出版社、新聞社、小売業者、蔵書家を地域ごとに一覧化したものです。こちらも奈良女子大学学術情報センターのリポジトリで公開しています。あわせてご参照ください。

## なら 奈良県地域振興部との共同研究 【水垣 源太郎】

2020年度、本学と奈良県との共同研究「奈良県南部東部地域の集落構造分析と社会地図化」を実施しました。これは2019年度に実施した「奈良県南部におけるコミュニティ開発の拠点形成と人材蓄積過程」に続くものです。

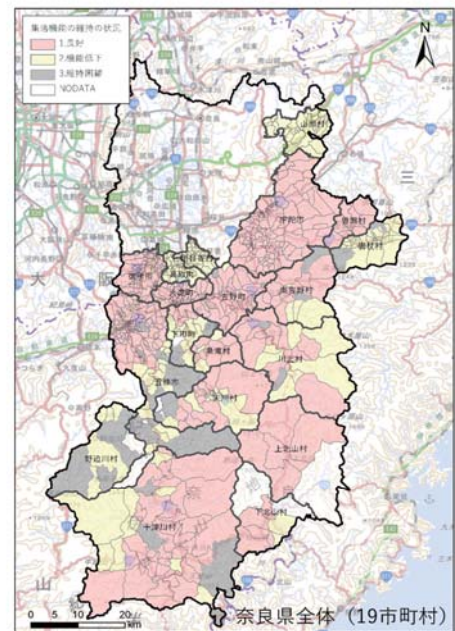
2019年度の共同研究では、二地域居住などの「関係人口」や観光などの「交流人口」、コミュニティでの生活をアクティブに変革していこうとする「活動人口」をいかに増やすかという観点から、奈良県南部のコミュニティ開発拠点を中心とした社会ネットワークの調査分析を行いました。

これに対して、今年度は、定住人口と地縁型組織に基づいた従来型のコミュニティの現状を明らかにすることに努めました。そこで、総務省と国土交通省が令和元年度に実施した「過疎地域等の条件不利地域における集落の状況に関する調査」のうち奈良県南部東部17市町村の回答を抽出し、周辺2町への新規調査を加えて19市町村の分析を行いました。

奈良県では、全国や近畿圏の過疎地域と比べて、少子高齢化の進んでいる集落の割合が高くなっています。それにもかかわらず、田畑・山林などの地域資源の維持や農林業生産・冠婚葬祭などの相互扶助といった集落機能については、全集落の約3分の2が「良好」と回答しています。集落の今後の消滅の可能性についても9割弱は「当面は存続可能」と回答しています。もっとも「良好」の割合は全国および近畿圏と比較して低く、「10年以内に消滅」および「いずれ消滅」の割合も高いのです。はたして本当に10年後も良好に維持できているのか懸念されます。

また、病院・診療所、飲食店・喫茶店といった中心地機能のあることが集落機能の維持にとってプラスに働き、市町村役場・支所、公民館・集会所があること、転入者があることがマイナスに働くという、気になる結果も分かりました。さらに、住民の生活の質の維持に向けた取組は交通輸送支援や高齢者支援が主ですが、自治体の輸送サービスへの依存度が高い、配食サービスが少ない、などの課題も見えてきました。

今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大で詳細な現地調査ができませんでしたが、コロナの影響が過疎地域の生活にどのような影響を与えているのかにも注目しています。



奈良県19市町村における  
集落機能の維持の状況

奈良県では、全国や近畿圏の過疎地域と比べて、少子高齢化の進んでいる集落の割合が高くなっています。それにもかかわらず、田畑・山林などの地域資源の維持や農林業生産・冠婚葬祭などの相互扶助といった集落機能については、全集落の約3分の2が「良好」と回答しています。集落の今後の消滅の可能性についても9割弱は「当面は存続可能」と回答しています。もっとも「良好」の割合は全国および近畿圏と比較して低く、「10年以内に消滅」および「いずれ消滅」の割合も高いのです。はたして本当に10年後も良好に維持できているのか懸念されます。

また、病院・診療所、飲食店・喫茶店といった中心地機能のあることが集落機能の維持にとってプラスに働き、市町村役場・支所、公民館・集会所があること、転入者があることがマイナスに働くという、気になる結果も分かりました。さらに、住民の生活の質の維持に向けた取組は交通輸送支援や高齢者支援が主ですが、自治体の輸送サービスへの依存度が高い、配食サービスが少ない、などの課題も見えてきました。

今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大で詳細な現地調査ができませんでしたが、コロナの影響が過疎地域の生活にどのような影響を与えているのかにも注目しています。

## なら シンポジウム「下市町の歴史の再評価」参加記 【松田 度(大淀町教育委員会)】

## ■はじめに—下市を見直す—

2020年12月20日（日）、令和2年度奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所のシンポジウムは、下市町との連携事業として開催されました。

大和・紀伊半島学研究所の連携シンポジウムは、平成30年度（大淀町）、令和元年度（東吉野村）に引き続き3回目。今回は、世界中で猛威をふるう新型コロナウイルス感染症防止対策として、下市町を講演会場、奈良女子大学を視聴会場とする「オンライン中継」での開催。定員は40名ということでしたが、実際の参加者は少なく、視聴会場は20名程度だったように思います。ただし、講演会場には下市町関係者が視聴できる席が設けられ、ぼくはご好意でその一席をいただきました。

さて、今回のテーマは「下市町の歴史の再評価～歴史的アイデンティティを取り戻す～」。下市町は数多くの歴史遺産に恵まれ、かつて商都として栄えました。杉の割箸、桧板の三宝や塗器といった木工製品、日本最初の流通手形「下市札」（平成25年、下市町指定文化財に指定）も商業史に残る遺産です。2月に行われている初市は、中世にさかのぼる六歳市（毎月2・7日に開かれる市）のなごりで、下市の地名の由来もこれによるとされます。

この12月には、町の文化財を紹介する冊子も改訂されています（下市町教育委員会編『下市町の文化財』2020年）。しかしながら、学芸員の配置、資料館の整備など、その保存・活用を進める仕組みは十分整備されていないのが実情です。

一方で下市町は、奈良女子大学との包括連携により、2011年度から下市町柝原の農家を応援する「らくらく農法」というとりくみを進めてきました。今回は、大和・紀伊半島学研究所との連携で下市町の歴史的な背景を深く掘り下げ、そのアイデンティティを取り戻そうという試みです。

## ■シンポジウムの概要

まずは講演会場から、奈良女子大学・奥村和美さんの司会進行でシンポジウムが開会。次に視聴会場から大和・紀伊半島学研究所の保智己所長による挨拶。

続いて講演会場で同研究所・西谷地晴美さんによる講演「下市の歴史的位置」です。

論点は現在、五條市を基点として十津川へと続く、いわゆる「熊野街道」の変遷をめぐる。西谷地さんは、かつて「熊野街道の夜」（『日本史論－黒潮と大和の地平から』奈良女子大学叢書2敬文舎2017年）で、「本来の熊野街道は下市町が基点だった。それが、戦後の自治体史（大和下市史・五條市史）の編さんにともない、五條市に変わってしまった」と指摘します。どうしてそうなってしまったのか。西谷地さんはそこに、戦後の下市という地域のアイデンティティの喪失をみえています。

ここで注目されるのが、下市町の北端に位置する吉野川の大橋（千石橋）の歴史です。西谷地さんによると、もともと下市は18世紀頃から「郡中之府」とみなされ、吉野川を渡る往還道でほぼ唯一の恒久橋（大橋・千石橋）を擁していました。そして、その維持管理にかかる吉野川南岸の近郷の「合力」には、下市の衆が主導的な役割を果たしていたといいます。熊野街道が下市町を基点にしていたのも、そのことと関連がある、というわけです。

では、その「郡中之府」たる下市町を支えていたのはどんな人々で、その認識はいつから始まったのか。西谷地さんは今後検討すべき大きな課題として、上記の問題を提案されました。



シンポジウムの案内ポスター

次に、斉藤恵美さんの講演「宗教空間の連続性と特異性からみる下市町」は、延喜式内社・丹生川上（にうかわかみ）神社をめぐる議論です。斉藤さんの得意とする「信仰」と流通路・経済資本（富）との関係性を説くものでした。結論からいうと、「古代の丹生川上神社は下市町にある。その理由は、東西南北の大流通路の結節点にある<市場町>としての特異性が挙げられる」とのこと。水への信仰を示す水分（みくまり）系神社、鉱山資源にかかわる信仰を示す丹生系神社の分布の違いに注目したところもユニークでした。ただし、講演内容は、丹生川上神社の所在地論争に決定的な論拠を示すものではなく課題が残りました。この<丹生>という概念。いったい何を指すのかという議論は古くからありますが、一般的には水銀朱の事だと理解されるむきがあります。私見は斎藤さんの所論とはすこし異なり、鉱泉（炭酸水素塩泉）、地元では「シヨッパイカナケの水が湧くところ」とのかかわりや、高野山（空海）の守護神である丹生都比売（ニウツヒメ）信仰とのかかわりを考えています。今後さらに議論が深められるテーマと思います。

3人目の講演者は、地元下市町の郷土史家・大西一則さんによる「南朝の武士団と下市の商人」。流れるような話術で、豊富な写真を多用しながら、南北朝時代の武士団の記憶から現代の風景まで、商都・下市の歴史を概観するものでした。

現在の千石橋は、木橋だった1代目（幕末）、鉄橋となった2代目（明治25年・1892）、3代目（昭和5年・1930）、4代目（昭和38年・1963）、5代目（昭和56年・1981に改修）と、およそ200年に渡り吉野郡中の交通の大動脈を支えてきた記憶を宿す近代の遺産です。

大西氏の思い出深いエピソードの一つが3代目千石橋の話。昭和34年（1959）9月の伊勢湾台風による被害をうけて、3連トラスだった3代目千石橋の2連が破損しましたが、残る1連を阿田橋として五條市（上島野～六倉間）に移築。39年の間「大正橋」の名称で親しまれました。

平成14年（2002）、この「大正橋」も老朽化のため役目を終えて解体され新たな阿田橋が竣工しましたが、その部材の一部が40年ぶりに下市町へ里帰りし、今も下市観光文化センター内の歴史展示室で見ることができます。

最後に、「今西行」と呼ばれた下市町出身の歌人・前登志夫（1926-2008）の言葉が紹介されました。「吉野の山人達はどこかシャイな含羞（がんしゅう）がありいつも時代のものとも知れないプライドもある」。まさに下市町のアイデンティティを語るに落ちる名言といえます。

まとめとなる総合討論では、3名の講演者が登壇し、会場の参加者の質疑応答に答えました。視聴会場からは、町の歴史を再評価することで、観光振興とどのように連携をしていくのかといった鋭い質問もありました。今回は、そこまでの議論には至りませんでした。その土台となる歴史認識の見直しをきっかけにして、次の展開につなげるという方向性が確認されました。

最後に視聴会場から、下市町副町長による参加者への御礼の挨拶と、下市町・奈良女子大学の連携事業の見通しが述べられシンポジウムは終了しました。

#### ■おわりに—課題と展望—

今回の連携シンポジウムは、すこし辛口な評価でいうと「普通」。個人的にも「消化不良」だったように思います。

オンライン中継という試みは、大きな失敗こそありませんでしたが、後の感想を聞いてみると、視聴会場の参加者からは「音声聞き取りにくかった」「期待していた内容ではなかった」といった意見がありました。



講演会場（下市町）のようす

## 研究所の活動状況（2020年度）

### シンポジウム等

- ◎第29回なら学研究会（なら）  
「春日神鹿保護会の記録・組織・活動  
一鹿の保護活動と  
その当事者たちの分析―」  
日時：2020年8月23日  
場所：zoom によるオンライン開催
- ◎第16回若手研究者支援プログラム（古代）  
「訓話と注釈」  
午前 研究発表会  
午後 講演  
日時：2020年8月23日  
場所：zoomによるオンライン開催
- ◎なら学勉強会（なら）  
「『ならら』編集の日々を振り返って」  
日時：2020年9月20日  
場所：zoom によるオンライン開催
- ◎第30回なら学研究会（なら）  
「近世奈良町の木辻遊廓」  
日時：2020年10月25日  
場所：zoom によるオンライン開催
- ◎下市町×大和・紀伊半島学研究所  
連携シンポジウム（研究所/古代 共催）  
「下市町の歴史の再評価  
～歴史的アイデンティティーを  
取り戻す～」  
日時：2020年12月20日  
場所：下市町役場（講演会場）  
（吉野郡下市町大字下市1960）  
奈良女子大学（リモート会場）

- ◎第31回なら学研究会（なら）  
「いかにして〈なら学文献〉を  
料理するか：研究アプローチと課題」  
日時：2021年2月20日  
場所：zoom によるオンライン開催
- ◎なら学研究センターシンポジウム（なら）  
「社会課題解決のための社会技術の  
事例を考える（仮）」  
日時：2021年3月20日（予定）

### センター主催セミナー

- ◎2020年度第1回（通算第22回）  
共生科学研究センター内セミナー（共生）  
藤平 眞紀子（環境科学系 准教授）  
日時：2021年1月19日  
場所：zoomによるオンライン開催
- ◎2020年度第2回（通算第23回）  
共生科学研究センター内セミナー（共生）  
上尾 達也  
（共生科学研究センター 研究員）  
田中 亜季  
（共生科学研究センター 研究員）  
日時：2021年3月2日  
場所：zoomによるオンライン開催

### 地域貢献事業

- ◎小中学生対象「野外体験実習」（共生）  
日時：2020年10月10日  
場所：奈良女子大学

### 開講科目

- ・共生科学（共生）
- ・地域社会の課題演習（共生）
- ・共生科学特別演習A（共生）
- ・歴史学演習（古代）
- ・なら学（なら）



### 編集後記

今年度はコロナ禍により対面での活動が行えない時期もあったため、研究所の活動の多くは、オンラインを活用した形で行われました。オンラインでのシンポジウムでは、休憩時間などに雑談や交流が行いにくいという点がある一方、遠方からもシンポジウムにご参加いただけるという良い点もありました。対面での活動ができるようになったとしても、オンラインの良さも活かしていきたいと思っております。今後ともご支援のほどよろしくお願い致します。（村松）

制作発行 奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所  
編集者 狩俣 順也 川根 昌子  
榎谷 けい子 村松 加奈子  
連絡先 〒630-8506 奈良市北魚屋東町  
Tel 0742-20-3762  
担当事務 研究協力課  
URL <http://www.nara-wu.ac.jp/kyi>  
E-mail [ky-i@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:ky-i@cc.nara-wu.ac.jp)